第58回シンポジウムルポ

久野　誉人（筑波大学）

昨年9月，創立50周年の記念式典・講演会，そして秋季研究発表会が六本木の政策研究大学院大学で華々しく開催されたのはまだ記憶に新しいところです．その陰に隠れてしまいがちですが，2週間後の10月13日，やはり50周年記念事業の一つとして第58回シンポジウムが「職業としてのOR」をテーマに中央大学後楽園キャンパスで開かれました．このシンポジウムは，現在ORを学んでいる，あるいは，これから学ぼうと考えている学生たちに，その学習の先にどんな将来が待っているのかを垣間見てもらおうと企画されました．そのため，先端の研究動向が報告される通常のシンポジウムとはやや趣を異にし，午前の4大学交流授業「問題発見とモデル化」の報告，午後の基調講演・パネルディスカッションの2部構成で実施されました．研究発表会から2週間も間が空いて客足が心配されましたが，大入とはならなかったものの，幸い50名を超える参加者を集めて盛況のうちに終了しました．

「問題発見とモデル化」は，慶應義塾大学，筑波大学，東京工業大学，早稲田大学の4校がそれぞれの学部3年生を対象に開講している授業科目で，テーマとなる問題を学生が自分で見つけ，その解決策を自分で考え，その成果のプレゼンテーションまでを行う実習授業です．4校の優秀作品を集めた交流授業は平成15年から毎年，春季研究発表会の会場を間借りして行われていますので，ご存じの方も多いのではないでしょうか．このユニークな実習授業への取組みについて，各校の授業担当者である小澤正典氏（慶應），吉瀬章子氏（筑波），矢島安敏氏（東工），逆瀬川浩孝氏（早稲田）から苦労話なども交えて報告がありました．また同時に，本間祐大氏（慶應），高野祐一氏（筑波），北原知就氏（東工），高達英成氏（早稲田）が，交流授業の様子をリアルに再現しながら，学部3年生当時の成果である「料金所ETC化による渋滞緩和効果の評価」，「コロッケ販売個数の予測NEWモデルの考案！」，「消費税率変動時における，消費者行動に基づいた消費税率の妥当性」などの発表を行いました．彼らはすでに独り立ちした研究者であったり，博士後期課程の学生であり，学部のときに習ったばかりの知識で取り組んだ素朴でつたない内容に赤面する場面もありましたが，そのことを客観的に指摘できるほどの成長が伺えて，むしろ感動的ですらありました．

午後の部では，まず，OR職業人の大ベテランとして株式会社サイテック・ジャパンの伊倉義郎氏から，米国在住中の興味深い体験談を中心とした講演がありました．「迷ったときには，あえて困難な道を選んできた」という氏の言葉にはしびれるものがありましたが，保守的な最近の学生諸君にどう響いたでしょうか．また，年齢的には伊倉氏よりもずっと学生たちに近い石井儀光氏からは，筑波大学で都市計画を修めたのち，就職先の国土交通省などで実際に携わった調査や研究に関する講演もありました．この2つの基調講演が終わると，シンポジウムの実行委員長である株式会社フレームワークスの高井英造氏が司会となり，パネラーに伊倉，石井の両氏のほか，太平洋セメント株式会社の香月毅氏，NTTアドバンステクノロジ株式会社の新野美幸氏，株式会社数理システムの田辺隆人氏を加えてパネルディスカッションが行われました．職場でORを使うことの難しさ，またORを使ってもらうことの難しさなど苦労話が主な話題でしたが，それがうまくいったときの様子を語るパネラーの顔はいずれも輝いており，フロアーの学生たちにも「職業としてのOR」は刺激的で面白いことが十分に伝わったものと確信します．

さて，バブル期には3千人を超えていた正会員の数はいまや2千人強と3分の2まで減り，学生会員にいたっては2月末現在でわずか219人しかいません．少子化の影響もあるでしょうが，この219人に将来のOR学会を託すのは何とも心許なく，また酷でもあります．ORの輝かしい未来のためには，このシンポジウムやSSORのように学生を対象とした啓蒙活動にもっと本腰を入れ，1人でも多くの優秀な学生に会員になってもらうことが肝要ではないでしょうか．